

# UMAP による短期在外研究者との交流 活動報告

Report on exchange activities  
with overseas researchers through UMAP

金城壽子<sup>1)</sup>、川崎佳代子<sup>1)</sup>、吉岡恵<sup>1)</sup>、Maleewan Lertsakornsiri<sup>2)</sup>、  
竹尾恵子<sup>1)</sup>、キシ・ケイコ・イマイ<sup>1)</sup>、弓削美鈴<sup>1)</sup>、丸山陽子<sup>1)</sup>

Hisako Kinjo, Kayoko Kawasaki, Megumi Yoshioka, Maleewan Lertsakornsiri,  
Keiko Takeo, Kishi Keiko Imai, Misuzu Yuge, Yoko Maruyama

キーワード：国際交流、UMAP(University Mobility in Asia and the Pacific)、  
共同研究活動、母性看護学・助産学、うつ（状況）の調査

Key words：International exchange, UMAP(University Mobility in Asia and the Pacific),  
Collaborative research activity, Maternal health & Midwifery nursing, Study on depression

## Abstract

Saku University accepted one faculty member (Dr. L, an assistant professor at St. Louis College) from the Kingdom of Thailand, as a short-term overseas researcher under the auspices of UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific).

We discussed with her education and research for maternal health and midwifery nursing because those are her areas of specialization. She observed several classes and give lectures to our students about the practices of midwifery and nursing education in Thailand. We planned collaborative research and started the research project entitled "Factors related to depressive states during pregnancy and puerperal periods". In this research, it is necessary to disseminate questionnaires to women in pregnant and puerperal period. We are now continuing this research in Japan and Thailand using the same questionnaire in respective languages.

Another exchange activity during Dr. L's stay included her participation in regional maternal and child health promotion activities during which ideas were exchanged with Japanese midwives.

---

1) 佐久大学 Saku University

2) セントルイス大学(タイ) Saint Louis College(Thai)

## 要旨

UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific) を通じて佐久大学は、今回、タイ王国セントルイス大学助教であるL氏を短期在外研究員として受け入れた。専門分野は母性看護学・助産学、滞在期間は1ヶ月であった。滞在期間中の交流活動は、地域母子保健活動への参加、地域助産師との交流、共同研究の推進、講義などを通じた教育活動への参加などであった。研究活動においては、妊娠期、産褥期のうつ症状と関連要因に関する共同研究を推進し、現在、継続的に当研究を進めている。

### I. はじめに

UMAP (University Mobility in Asia and the Pacific) は、高等教育分野におけるアジア太平洋地域の大学間交流、学生交流を通じて、地域内の学術研究協力の推進と教育の質を高めることをめざしている。そのUMAPを通じて佐久大学は、今回、タイ王国セントルイス大学准教授であるL氏を短期在外研究者として受け入れた。専門分野は母性看護学・助産学で、期間は2009年5月1日から30日までの1ヶ月であった。受け入れ担当者は専門領域が共通するA、B教員（以後、教員を省略）の2名、総括責任及び相談役としてC、協力者としてDがその任に当たった。1ヶ月の短い滞在期間であったが、教育、研究、文化を含む幅広く密度の濃い交流を行った。

今回の報告は、交流活動の内容・結果及び一部評価について記述したものである。

#### 1. 交流活動の概要

主な活動内容を表1に示した。受け入れ担当者との共同研究計画の立案と実施、佐久大学看護学部及び別科助産専攻学生への講義や演習への参加などの教育活動、地域の母子保健活動への参加、地域の助産師との交流、及び文化交流等であった。

表1 交流活動の概要

Table.1: Overview on the international exchange activities

1. 共同研究 Cooperative activity on research
2. 教育活動 Participation in the Educational activities
1) 講義の実施 Giving lectures about; - 別科助産専攻：『国際化と助産師』 Midwives & Globalization for the midwifery major students. - 看護学部1年生科目：『看護基礎理論』 Fundamental theory of nursing for the undergraduate students
2) 『導入基礎演習』への参加 Participate in the problem based learning (PBL)
3) 演習の見学 Observation on nursing-practicum
3. 地域の母子保健活動の見学 Observation on maternal-child health in Saku-City, Nagano Japan
4. 地域の助産師との交流 平成21年度「国際助産師の日」イベント（日本助産師会長野県支部）への参加 Exchange information in JMA (Japanese Midwives Association) regional conference, Nagano, Japan
5. 地域の病院見学 Hospital tour in Nagano
6. 文化交流 Sightseeing tour
1) 教員・学生による地域案内 Guide to Saku Area by Faculties & students.
2) 歓送迎会 Attending at Welcome & Farewell party

## II. 交流活動の実際

### 1. 共同研究

交流活動の中心課題である「共同研究」の研究計画策定においてはA、B、Cらに加えて、E、F、Gの3名も参加し、来日前から双方で研究テーマに関して検討を行い、文献収集、抄読会等を通して絞り込みを行った。最終的に研究課題は「妊娠期・産褥期のうつ症状とその関連要因について～日本とタイ国の状況～」に決定した。

研究目的は、妊婦と褥婦に対して産前・産後のうつ症状とそれに関連する要因を探り、産後うつ病発症の予測、予防のための早期介入方法を探る事となった。

妊娠期・産褥期うつの関連要因については文献レビューを行い、妊娠期と産褥期で多少の違いはあるものの、妊娠・育児に伴うストレス、ソーシャルサポート、自尊感情などが関連し、加えて婚姻状態や夫婦関係、望まない妊娠などの妊娠に伴うパーソナル要因も関連するといわれている。

そこで研究に用いる測定具として、共同研究者であるCらが既に日本語版を開発しバックトランスレーションを経て、看護学生についてのデータ収集解析中のうつ症状測定尺度日本語版(DSJ)、ストレス尺度日本語版(PSJ)、ソーシャルサポート尺度日本語版(SSJ)、自尊感情尺度日本語版(SEJ)を用いることにした。これらの各ツールを構成する細項目について、そのツールの信頼性、即ち内部一貫性に関しての検証ではCronbachの $\alpha$ 係数=0.82以上の結果を得ている。タイ国側も既に先行している共同研究で上記ツールのタイ語版は開発済みである。今回産褥期については既にツールの信頼性と妥当性が証明され使用許諾が認められている「日本版エジンバラ産後うつ病自己評価表(EPDS)」も併せて用いることにした。

産後うつの問題は、発生率の高さだけでな

く、育児における重要なリスクファクターになり得ることや、家族崩壊へつながる可能性を含むなど影響は深刻である。日本では厚生労働省が進める国民行動計画「健やか親子21」で、またタイ王国では、第10回タイ健康増進プラン(2007-2011)でその発生率を減少させることが重要課題として取り上げられている。日本・タイ両国において共通の国家的課題であり、同じアジア圏にありながら、歴史や文化の違うタイ王国との共同研究によって、両国の特徴や共通性を見いだすことができると考えている。短期在外研究者の滞在期間内に共通言語として英文による研究計画書を作成し、現在それぞれの大学の倫理審査委員会へ研究計画書を提出する段階である。

### 2. 教育活動

#### 1) 講義及び評価

本学別科助産専攻の科目である「国際化と助産師」において12名の学生を対象に表2に示すような題名で3回の講義が実施された。その他に5月13日には看護学部1年生(84名)を対象に「Nursing Education system in Thai, Health Care System & Nursing Activity」のトピックで講義が行われ、30数名の聴講者がいた。

表2 別科助産専攻学生への講義トピック  
Table.I: Dr. L's lecture topic

トピック (topics)	
1	Health Care System in Thai, and the Maternal & Child Health
2	Midwifery Education System in Thai
3	Infertility & the Nursing Care System in Thai. Health Care System & Nursing Activities in Thai.

講義は英文による講義資料が毎回事前に配布され、科目担当教員が通訳を行った。講義

は、看護学部学生・教職員にも聴講できるように公開授業とした。

聴講生として毎回10名前後の看護学部2年生が参加し、タイの看護教育や助産師の活動について学んだ。学生からはタイの母乳育児割合が低い理由についての質問があり、出産後間もなく都市部へ出稼ぎするタイの母親の現状の説明を受け、日本の母乳育児の状況と比較し興味を示していた。このように学生は、他の国の文化や看護の現状を知り疑問を持ったことで、さらに自国の文化や看護にも興味を持って学ぶ機会を得ていた。この講義の2ヵ月後に行われたオープンキャンパスの大学紹介において、本公開授業に参加した看護学生から、L氏から受けた講義のことが紹介され、違った文化や看護に触れた喜びを集まった高校生へ生き生きと伝えていた。

各回の講義終了後、別科助産専攻学生12名に対し、学生の了解を得て、科目担当者が作成した調査票を用いて評価を実施した。受講前後の講義への関心度、講義の理解度について、リッカート5段階自己評価（全くない、あまりない、普通、よくある、とてもある）を行った。自己評価は「全くない」が1点、「とてもある」を5点として、得点数値が高いほど関心や理解があることを示すようにした。結果は表3のとおりである。

講義トピック1、2、3について、その関心度を講義前後で比較してみると、トピック1およびトピック3で、講義後に関心度スコアが上昇していた(T-Test)。これらのトピックの内容はタイの保健医療情報、および不妊症に関する病態とケアに関する知識であった。関心が高まった理由としては、新たにタイについての知識を得て、あるいは日本と比較して差のない医療システムであったことを知った学生の驚きが影響しているのかもしれない。

『講義への理解度』は、3.08 - 3.42であり、3つのトピックとも「普通」といったレベルであった。また、英語による講義の理解

表3 外国人講師による講義への反応  
(助産学生12名)

Table.3: Students' response on the international lecture

Topic of the lecture	講義前 関心度 students' interest before the lecture	講義後 関心度 students' interest after the-lecture	講義の 理解度 Students' level of understanding
1	3.75 ± 0.62	4.00 ± 0.60**	3.08 ± 0.67
2	3.83 ± 0.58	3.83 ± 0.58	3.17 ± 0.39
3	3.67 ± 0.49	3.92 ± 0.52*	3.42 ± 0.52

The average scores and SD of students' before/after interest & understanding on the lecture, using self-made 5-point Likert scale.

\*<0.05, \*\*<0.01

N = 12 (students majoring midwifery)

度という観点からみれば、回数を重ねて、英語による講義に慣れ、理解度がトピックの開講時期順に、最後のトピック3で高くなったとも考えられる。

『外国人の講義をより理解するために考えられること』という質問に対して得られた11名の回答内容は22件あり、KJ法により3つのカテゴリーに分類された。B、Gが分類したカテゴリーは、「語学関係11件」、「講義内容9件」、「外国の情報不足2件」であった。

今回のように外国人による講義を受講することは、学生が教養として培った語学を実際に活かしたことになった。短期在外研究者による講義を本学のカリキュラムに組み入れたことで、学生が国際化された学習環境を直接感じたことは有意義であった。外国人の授業によって学生は語学力の必要性を実感し、今

後も継続した語学学習を動機づけたと考えられる。

また講義の中で、セントルイス大学看護学部の助産教育カリキュラムが紹介され、その中に母国語と外国語（英語）による看護系の文献講読があり、看護と語学学習の両面で学べるように意図的にカリキュラムが構築されていることも知ることができ、学生への刺激となったと同時に一教員としても羨ましさを感じた。

聴講した学生は、講義内容のうち、タイの母子保健の特徴を現している政策に関心を持って、聴講した内容や英語資料を振り返り学習内容を整理していた。その講義内容は「A Guest from Thailand」と題して月刊誌に投稿していた（高橋，2009）。その中からタイ国で取り組まれた“モデルマザー”事業が、母子保健事業を向上させた現状が述べられている箇所を抜粋し、講義内容の一部として紹介する（資料1）。

#### 資料1 「A Guest from Thailand」より

##### ●モデルマザーの設定

- 1) 子どもは20～30歳の間に産む。
- 2) 少なくとも3年の間隔をあけて産む。
- 3) 望ましい子どもの数は2人まで。
- 4) 妊婦健診は最低4回。分娩は資格のある医療者のもとで。
- 5) 子どもに破傷風ワクチンを全回数受けさせる。
- 6) 産前産後の正しい運動習慣。
- 7) 3000g以上の子どもを産むように。
- 8) 少なくとも最低6か月間は母乳で育てる。
- 9) 子どもの栄養に気をつける。
- 10) 子どもには年齢ごとに決められた予防注射を受けさせる。

●産前産後の健診の徹底。92.2%が4回の妊婦健診に訪れている。

●母子手帳の有効利用、98.9%。

●4か月未満時の母乳育児率は13.8%（2002年）。1995年の3.6%よりは上がったとはいえ、だいぶ低い。日本ではこの年齢の乳児はほぼ半数が母乳で育てられている。タイではこの数字を30%（2006年末まで）にもっていきたいとしている。このように低い理由は、働く母親の産休が1か月と短いことや、大家族ゆえ両親に子どもを預けて母親は働くパターンが少なくないためという。しかし、現在一世帯当たりの家族数はどんどん減っている。1990年5.6人だったが、2000年には3.6人。大家族で暮らすのが一般的だったが、昨今は親元とは別にアパートで暮らす青年層は増えている。

●分娩での入院日数は平均2日。もし、新生児にさらなる入院が必要な場合も通常、母親は退院。ただし、母乳育児のため、あるいは育児教育のため、母子の入院を許可する施設もある。

#### 2) 『導入基礎演習』への参加

5月20日(水)・21日(木)には、看護学部1年生の宿泊研修『導入基礎演習』に参加した。L氏は学生が主体となったグループワークやレクレーションに参加し、学生や教員と交流した。その際、教員による通訳を通して、学生がグループで取り組む課題や発表会の内容を理解していた。学生がレクレーションとして行った花火にも参加し、学生と一緒に楽しんでいった。

さらに初日の夜には、「Problem Based Learning in Nursing Education」というテーマで、一部の宿泊演習参加教員とL氏によるディスカッションが行われた。はじめに、L氏よりPBLの定義や歴史、目標や過程、学生や教員の役割、PBLアセスメントといった内容を盛り込んだ資料を用いたプレゼンテーションがあり、続けて、ディスカッションを行った。セントルイス大学では、患者の事例を用いてPBL教育が実施されていることを知っ

た。事例の提示、難解な専門用語の解説をうけた後に、学生はPBLを用いてその患者の看護を導いているということであった。またコース終了時には、教員による学生の評価、学生の自己評価とメンバーからの評価を受けて、この学習方法が継続できるように支援されているという。参加教員は、宿泊研修初日の疲れにもかかわらず、PBLについて具体的に学ぶことができた。

2日目は、初日の発表の評価を受けて、今後の活動を考えるという学生のグループワークがあった。グループワーク終了後に、L氏が自分の体調管理のために毎日実践しているというヨガの実演が行なわれ、学生、教員ともに参加してヨガを体験した。ヨガ体験の参加者からグループワークの疲れが吹き飛ぶような心地よい笑顔が見られ、笑い声が響き良いリフレッシュとなった。

### 3) 演習の見学

別科助産専攻『ウイメンズヘルス』の学生のプレゼンテーション及び看護学部2年生『生活援助論』における「浣腸」の演習を見学した。

## 3. 地域の母子保健活動の見学

5月15日(金)に佐久市保健センターで行われた「4か月児乳幼児健診」を見学した。Aと通訳としてDが付き添った。係長及び課長にL氏の紹介と挨拶を行った後会場に移動し、健診に集まった母親たちの前でL氏を紹介し、途中写真撮影をさせていただくが、いやな場合は遠慮なく知らせていただくように依頼した。事前に佐久市保健センターで行われる健診のスケジュールや内容を翻訳して渡し、理解してもらうように準備した。健診の当初から終了まで、Dの通訳で全体の流れを熱心に見学していた。受付、身体計測、個別相談、離乳食のお話、歯の相談、診察、事後相談とお母様方の健診の流れに沿って丹念に見学していた。L氏は人柄のせい、屈託なく母親

たちの輪に入り、母親たちも心よく受け入れてくれて、子どもをあやしたり、抱いたり、写真を撮影したりしながらスムーズに健診の各場に適応していた。

## 4. 地域の助産師との交流

5月16日(土)・17日(日)の2日間、A、Bの2名が付き添って、平成21年度「国際助産師の日」イベント(長野県日本助産師会)に参加した。1日目の16日(土)は上伊那郡「望岳荘」で行われた「日本助産師会長長野県支部」総会及び総会後のグループ討議、夜の懇親会とすべての行事に出席した。総会では司会者からL氏の紹介とオブザーバーで出席している旨の説明があった。出席者は約70名であった。夜の懇親会では参加した多くの助産師がL氏に関心を示し、屈託なく話しかけていた。L氏も心から楽しんでいる様子が伺えた(参加者80名)。2日目の17日(土)は、場所を変えて上伊那郡「中川文化センター」で行われた「国際助産師の日 母親サミットin信州」に参加。聖母大学教授 徳永瑞子氏による「アフリカのお母さんアフリカのお父さん」の講演会に参加した。どしゃぶりの雨にもかかわらず、大きな会場一杯に小さな子どもを連れた親子、妊婦の夫婦が集った。講演の後で、西アフリカの伝統的なリズムやダンスを勉強し演奏している地元グループ「sabakan」の舞台を鑑賞した。

## 5. 地域の病院見学

### 1) 佐久総合病院：5月12日(火)

別科助産専攻の実習打ち合わせ会に同席し、終了後看護部長の案内で産科病棟と分娩室等の施設を見学した(同席者：看護部長、臨床実習指導者3名、事務長)。

### 2) 上田市産院：5月21日(木)

別科助産専攻の実習打ち合わせ会に同席し、終了後院長の案内で産院全体の施設を見学した。

## 3) 浅間総合病院：5月27日（水）

本学非常勤講師H医師のご好意によって、産科病棟、外来等、院内を案内していただいた。

## 6. 文化交流

## 1) 成田での出迎えと生活環境調整支援

来日当日（5月1日）、Bは成田で“welcome プラカード”を掲げてL氏を出迎え、新幹線、電車を乗り継ぎ大学に到着した。

学長、学部長、事務局長へ来日報告をすませ、宿舎案内、宿舎使用物品特に日用生活品の補充、充電器・私物のノートパソコンの電源・暖房器の使用確認、石油補充などメンテナンスについて事務方による説明に同行、日々の食料を調達するために市内スーパーを案内した。その後研究室を案内し、パソコン、鍵の管理方法などを説明した。歓迎会でセントルイス大学の紹介をDVDで行う準備をしたという希望を受けてAV器機の確認を行った。ついで、学内の公衆電話から国際電話ができないことがわかったL氏、BとDは国際電話用のテレフォンカードを求め、国際電話ができる公衆電話を探した。

## 2) 佐久大学オリエンテーション

連休明けの5月7日（木）、いよいよ1ヶ月間の研修に向けた準備が開始した。

L氏の活動に用意されたパソコンはツールバーが日本語版であったため、英語設定されたパソコンの設置が必要であった。その上、私物のパソコンが故障となり、英語による説明を常時必要としたL氏は、用意された研究室から別科助産の部屋に移動。さらにオリエンテーションに準備した新幹線時刻表、大学と別科助産専攻のカリキュラムが紹介されているパンフレットを提供したが、英語版で求められた。共同研究を想定してリストアップした英語文献、日本の看護教育システムに関する資料・地域紹介パンフレットは英語による説明が載せられているものを用意した。

生活環境の調整と並行して学内案内及び職員スタッフの紹介が、随時行われた。L氏は持参したお土産をさりげなく手渡していた。

学部長ガイダンスが同日11時から予定され、大学、及び別科助産コース開設に関わる説明があった。地元の総合病院で研修をしているエクアドルからのJICA医療職（医師、看護師）の来訪が予定されていて、学部長による当大学の紹介、看護教育システムの説明の研修スケジュールが組まれていたのでL氏も同席した。研修は英語で行われた。

ガイダンスの後、昼食を兼ねてカフェテリア案内と昼食メニューの見方と食券自販機の使い方を説明した。カフェテリアで学生に紹介、英会話サークルの学生らと親交を深めた。3日以降、L氏による講義の準備として資料の印刷、教室でのAV器機操作の確認を行った。大学施設の各講義室ではパワーポイントで作成したスライドのサイズが拡大しサイズの修正に戸惑う場面が複数回みられた。L氏は用意された教育機材の操作や調整に苦心しながら大学教職員と上手く交流を深めていた。

## 3) 教員、学生による地域案内

来日直後、L氏はゴールデンウィーク期間をフルに活用すべく5月1日から1週間有効のJR Pass（Japan Rail pass：短期滞在者向け特別乗車券）を自国で予約購入していた。そして、連日、東京周辺へ日帰り観光を行った。来日翌日の5月2日（土）は、F、Dと共に浅草、銀座、皇居を散策した。3日（日）は、L氏のリクエストによってF夫妻が運転を買って出てくれてBが同伴し、念願の日光東照宮に行くことができた。散策途中、まだ残っていた桜の花に感動する場面もあった。

4日（月）～6日（水）はL氏自身で東京都内を散策、7日（木）は、歓迎会後夕方にも関わらずJR Passを活用したいという本人の希望で、AとDが付き添って大宮氷川神社を散策した後、京懐石料理店から夜景を一望しながら日本料理を堪能し食文化にふれる機会

を得た。また研修中盤を過ぎた5月23日(日)には、Iの招待によりご自宅で夕食をご馳走になり、和装の試着を体験することができた。

その他、英語サークルのボランティアメンバーとBによる岩村田市内をはじめとする、佐久や上田地域の歴史、文化名所の観光めぐりも新鮮な交流となった。丁度ご開帳の時期で賑わっていた長野善行寺にもBとGで行くことができた。7年毎のご開帳の特別な催しとなる観音開き、回向柱、お数珠頂戴(偶然にも2回のチャンスが得られた)は、仏教徒であるL氏を興奮させたようであった。

#### 4) 歓迎会・送別会

5月7日(木)15時から歓迎会を開催し、21名の教員が参加した。自己紹介、今回研修の趣旨などの説明後、L氏からはDVDとパンフレットを用いたセントルイス大学の紹介があった。

5月27日(水)の送別会開催には、24名の教員が参加した。L氏からは、佐久大学の学生や教員たちとの交流を通して日本の妊産婦へのケアを学んだり、日本の文化を体験したりする機会が得られたことに、感謝の言葉が聞かれた(資料2)。

#### 資料2 Farewell party-speech by Dr. L

Dear Dean (Prof. Dr. C), Prof. Dr. J and Faculty Members

Thank you for all the kind support you and your faculty members all have given me during staying in Saku University. I am very impressive, happy and enjoyed working with you and your faculty members all. The time runs pretty fast. It is unbelievable that I have been in Japan almost one month and will come back to Thailand on this Saturday, I have gotten many experience. I shall keep everybody and many good things from you and your faculty members in my mind. As the saying goes, "All good things must come to an end." Indeed, I have grown to

become fond of you all.

I hope that the work I have done here has been useful to the Nursing Faculty at Saku University. I shall miss everybody when I return to the Nursing Faculty at Saint Louis College in Bangkok, Thailand.

I have e-mail address and will continue to communicate with you and your faculty members still after my return to Thailand in order to do the collaborative research. Thank you again for making my stay here at Saku University in Japan a pleasant one. I hope to see everybody again some day, perhaps in the near future. If somebody visit my College in Bangkok, Thailand, please let me know.

Thank you very much. Then I would like to advise something in Thailand about Thai culture, artistic, dance, sport, food, fruit and the famous place for traveling, after that during have a lunch I shall present my activities in Japan.

また、送別会の途中で別科助産専攻の学生が参加し、タイの助産師の活動を学び良い刺激になったと英語でお礼のメッセージと記念品が贈られた。送別会を通して、日本滞在中に撮った1000枚に及ぶ写真の一部が披露されて、佐久大学の多くの学生や教員と交流し、充実した時を過ごしたことが伝わってきた。最後に、タイの文化や観光などのスライドが多数紹介されて送別会は無事に終了した。佐久大学の教員にとっても、L氏との交流を通して、タイの文化や看護教育、母性看護の現状を知る良い機会となった。このような活きた体験は、これからの教育や研究活動の視野を広げる助けになると思われる。

### Ⅲ. おわりに

このように多くの教員の協力で、L氏と文化交流を深めることができた。日本滞在中を

通して、L氏の好奇心は旺盛で寸暇を惜しんで積極的に活動し、その活動性には感動を覚えるほどであった。同行した教員にとっては、普段見慣れた風景や文化が、L氏との交流の中で改めて新鮮さを取り戻し、見直すきっかけにもなった。

L氏との交流、研究活動からみえてきた反省と課題が明らかとなった。

- 1 国際的な研究活動に必要なITの整備、例えば英語版ツールバー表示、インターネットの接続、スカイプなどへのスムーズな接続
- 2 研究活動に必要な英文図書の設備、
- 3 英語版本大学紹介パンフレットやカリキ

ュラムの準備

- 4 生活環境として英語放送が視聴できるBS配信や宿泊先や学内から国際電話ができること
- 5 国際交流に必要なコミュニケーションができる人材サポート

さらに短期間で企画した共同研究がそれぞれの国で中断しないよう継続させることなどであった。

## 文献

高橋和江(2009). A Guest from Thailand. 病院経営. 411. 48-49.